

《原 著》

運動負荷 ^{201}Tl 心筋 SPECT 定量法による陳旧性心筋梗塞の 経皮的冠動脈形成術後の心機能改善予測

小 寺 顕 一*

* 鹿児島大学医学部第二内科

要旨 [目的]運動負荷 ^{201}Tl 心筋 SPECT および心プールシンチグラフィの定量指標を経皮的冠動脈形成術前後で比較し、左室駆出率の改善予測を試みた。[方法]経皮的冠動脈形成術 3~6 か月後に冠動脈造影検査を行った陳旧性心筋梗塞患者 28 例を対象とした。[結果]術 3~6 か月後に再狭窄を認めない群では、正常部位に対する形成冠動脈灌流域の ^{201}Tl のカウント比は、初期像では術 1 週間後・3~6 か月後共に有意に改善し(それぞれ $p < 0.05$, $p < 0.01$)、後期像では改善傾向を認めた。同群での術 3~6 月後の左室駆出率の変化量は、術前の SPECT 初期像および後期像のカウント比と有意な相関を認めた(それぞれ $r = 0.652$, $r = 0.645$)。重回帰分析では、術前の後期像カウント比と左室駆出率が、術後の左室駆出率の変化量の説明変数として選択された(重相関係数 = 0.776)。[結論]術前の ^{201}Tl 心筋 SPECT 後期像カウント比と、心プールシンチグラフィより求めた左室駆出率により、術後の左室駆出率の改善を予測できることが示唆された。

(核医学 37: 99-107, 2000)